



Title	大学における教育と研究
Author(s)	逸見, 勝亮
Description	「学士会会報」第844号（平成16年1月発行）所収
Citation	学士会会報, 844, 79-83
Issue Date	2004-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5811
Type	article
File Information	gakushi844.pdf



大学における教育と研究

はじめに 増えたのは学生数だけではない

田中毎実氏（京都大学）は、旧態依然たる教育の仕方と新たに大量に流入した学生たちの学習意欲とは、徐々にしかし大きく不適合になってきたが、大学は「教育」機関としての自己規定を十分に引きうけてはいない、と述べている（「大学の学校化 大学教育改革の行方と教育理論」『教育学研究年報』九、二〇〇二年）。著者は入学者の質的低下も繰り返し指摘しているから、「学生たちの学習意欲」が「学習意欲の低下」を意味しているのは確かである。学生数の増加にともなって「学生たちの学習意欲」は低下しているというわけである。曾我日出夫氏（茨城大学）は、「学生のレベルや意識は著しく多様化しており、全体的に自分でやろうとする意欲や自主性が低くなっている」と記す（『IDE 現代の高等教育』二〇〇三年六月号）。大学における教育就中入学初年次教育をめぐる議論は、「学習意欲の低下」が前提になっているかの如くである。

北海道大学の二〇〇三年五月現在の在籍学生数は、一九五三年の学生数四三三四人の二・六倍にもなる一万一二四六人である。いうまでもなく、このような学生数の増加は学部・学科・講座増設の結果である。そこに文部科学省の意向が反映していたことは明瞭であるが、要求したのは大学・学部であり教員である。学生数の増加には教員にも責任がある以上、学生の質を嘆くことは意味がない。しかも、「大量に流入した」のは学生だけではない。教員数も北大ではこの五〇年間に一〇四一人から二一三五人へと二倍に膨らんだのである。そもそも、「教育」機関としての自己規定は「学生の学習意欲」に左右されるものではない。

一 僕の学習意欲

「学生の学習意欲」を云々する議論に遭遇すると僕は縮み上がる。旧制高校から東京帝大を経たゼミの指導教官が、「最近の学生」（僕のことだが）は語学力が低く読書量は少なくなつたし学習意欲も低い、と面と向かって慨嘆したことを思い出すからである。頼杖をついている僕に「態度が悪い、やる気あるのか」と、授業中に忠告してくれた友人がいたことも思い出す。僕は、英文のゼミテキストを予習したことはなかつたし、討論に参加もせず、他の学生も似たり寄ったりで、もっぱら渋面の教員の長広舌を聴いていた。教員には嘆くに充分すぎる根拠があつたのである。僕が彼の長広舌 インド国民会議派が主導した独立運動とガンジーの「農村共同体の教育機能に依拠した民衆教育構想」をおも

しろがっていたことは知らない。否、二〇年も経ってから伝えたが信じなかったというのが正確である。蛇足だが、教授の正確な慨嘆は「札幌くんだりでこんな連中に教えるのか」である。

二 研究と教育

多くの教員は授業の負担を重いと感じている。一方、自分の研究分野の後継者（研究者）養成を考えていない教員はまずいない。大学院があればもちろん、なければ別の大学院へ送り込んでまで、多くの教員は「手塩にかけて」弟子を育てようとする。この後継者養成は、自分あるいは別の教員が担った教育の延長線上ではじめて成立する。あらゆる仕事の後継者養成（訓練、教育）を内在しているように、研究も教育を内在しているのである。研究にとって教育は不可欠の要素である。手塩にかけようとするなら、学生教育の全般にかかわるしかない。まして、他人の成果を摘み取って「自分の弟子」だけ育てようとするのは手前勝手であり、研究にたいする責任ある姿勢に欠けるといってもよいのである。教育全般の底上げに貢献することなく、手っ取り早く「良い学生」を獲得しようとする広い裾野を失うのは必定である。入試制度や受験科目のめまぐるしい変更が、「良い学生」を得たいという「邪心」によっていたことは隠しようもない。

村上陽一郎氏（国際基督教大学）によれば「研究者は非専門家である外部世界に対して、単に支援に対する反対給付としてではなく、そもそも倫理的義務として、自分たちのやっている研究の内容を説明し、納得して貰う義務があり責任がある」という（「一般教育の意味」『一般教育学会誌』第一八巻第二号、一九九六年十一月）。村上氏は理工系研究者が研究資金を獲得するという文脈で述べているのだが、「非専門家である外部世界」が文部科学省・日本学術振興会などではなく、広く一般のひとびとを意味していることも明瞭であろう。そして、眼前にいる入学したての学生こそ「非専門家である外部世界」そのものである。学生に伝えられない研究などあるはずがないのである。ある教授が「国民に奉仕する研究」と壮語したのに対し、学生が静かな声で「僕たちも国民です」と言ったのを思い出す。

三 教育と研究

僕が担当している講義のひとつに「近現代教育史」がある。「近現代教育史」を講じようとして、研究上の関心がなくとも学童疎開・陸海軍少年兵・戦災孤児・浮浪児などに言及

しておきたいと構想するのはごく自然であろう。いずれも概説書なら触れている事項である。ところが、これらの事項に関する研究は皆無に等しく、学生に伝えようとするだけで研究するしかなかった。数年間の講義を経て、「国民学校初等科児童の縁故・集団疎開（学童疎開）に関する歴史的研究」（一九八五～八七年度）、「少年兵募集方策の展開を中心とする学校と軍隊の結合に関する基礎的研究」（一九九三年度）、「第二次世界大戦後の日本におけ浮浪児・戦争孤児に関する歴史的研究」（一九九四～九五年度）というテーマで科学研究費の交付を得た。さらに、「少年兵士素描」（『日本の教育史学』三三、一九九〇年）、「第二次大戦後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史」（『日本の教育史学』三七、一九九四年）として学会誌に発表し、『学童集団疎開史 子ども達の戦闘配置』（大月書店、一九九八年）として上梓した。「自衛隊生徒の発足 1995年の少年兵」（『日本の教育史学』四五、二〇〇二年）は、一年生の講義「平和の学際的研究」で、自衛隊生徒（少年自衛隊）の「応募者数も分からないのか」という学生の質問に答えるべく調査した結果である。研究論文として公刊する前に、授業で学生による「試験」を経ているのである。僕の研究の大半は講義を母胎としている。そして、学生に伝えることができるなら、僕の研究も進展する。

四 教育と研究 最近の例をやや具体的に

二〇〇三年一〇月二八日の三・四限の教育史・比較教育専門演習に、諸都合で生じた空隙を埋めるために教育史学会（二〇〇三年九月二一日、同志社大学）口頭発表「戦歿者寡婦奈良特設幼稚園保姆養成所の歴史」をそのまま報告した。演習穴埋め臨時講義である。参加者は三年生三人、四年生六人、教員は僕を含めて三人であった。報告の構成は以下のとおり。

はじめに / 奈良特設幼稚園保姆養成所の設置 / 奈良特設幼稚園保姆養成所入所者の諸相 / 奈良特設幼稚園保姆養成所と皇族とのかかわり / 靖国神社参拝旅行 / 長いむすび
討論の際、学生から「戦争への貢献と生活困苦に対する『慰藉』と『憐憫』のために、戦歿者寡婦特設教員養成所へも皇族が訪れた」との説明では、戦歿者寡婦保姆養成所と皇族とのかかわりが唐突で分かりにくいとの指摘があった。他の学生・教員からも同様の指摘があり、改めて説明をつけ加えるべきだとまとまったが、学会ではこのような指摘はなかった。僕は学生との討論の意味を改めて確認し、同時に六月中に学会発表準備が整っていれば学生と一緒に揉んでもらえたのにと後悔した。一昨年学会発表の時にはそうした

のである。僕の中の手順を踏まえていなかったのも、学会発表当日は不安で仕方がなかった。僕の眼前の学生は、村上陽一郎が要求する「専門家の言うことを鵜呑みにするのではなく、健全な常識に基づいて、専門家が専門家であるがゆえに見落とししたり、見過ごしたりしている要素を見つけたり、判断する」ことができる「リテラシー」(教養)を備えているからである。

おわりに

「大学教育論」という講義を担当したときに、二〇人ほどの受講学生に演習・卒業論文指導を受けている教員の研究テーマを説明させたことがあった。正確に説明できたのは僕たちのゼミナールに属している学生一人だけだったので、学生も僕も驚いたのだった。研究第一といいながら、眼前の学生は教員の研究についてほとんど知らないのかもしれない。「教育」機関としての自己規定の不確かさは、よもや「研究」機関としての自己規定の不確かさのゆえではあるまい。

あるがままに受け入れることで、自立性の無視だ、学校化だと「原則的」的批判にさらされるならそれもいい。いかなる事柄でも、まともな相手として学生とわたりあうしかないのである。十一月一二日の昼休みに、三年生 彼は一〇月二八日の演習に参加していた に僕は「おう、何読んでる」と尋ね、彼は「今日のゼミでとりあげる文献を読みます」と言った後で、「先生、今何に取りかかっているんですか」と尋ねた。「学生の質がいいからだ」という“やっかみ”には「それも教育の成果」だとも記しておこう。